

特別講座 [A-1]

『学びの物語』を实践することの意味

司会者：鈴木佐喜子（元東洋大学）

報告者：黄木久美子（東京・ありんこ保育園）

山田真理子（東京・ありんこ保育園）

佐藤 寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

指定発言：マーガレット・カー（ワイカト大学）

大宮 勇雄（仙台大学）

通 訳：塩崎 美穂（日本福祉大学）



■企画趣旨

今年度実施の要領・指針等の注目すべき特徴は、保育・幼児教育の目標を具体的な「育ちの姿」（＝「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」）という形で示した点にあります。そして、この「育ってほしい姿」を踏まえて幼児一人ひとりの育ちを評価するという、新しい評価方法の具体化・導入に向けて、文科省中心に準備が進められています。

ところで、日々目にする「具体的な姿」は、一人ひとりの思いや事情、あるいはその子を取り巻く環境や人間関係とのかかわりの中で出てきているものです。それが「育ち」としてどんな意味を持つかは、それぞれの子どもや状況によって当然異なっているはずです。

しかし、万が一、そうしたことを踏まえずに安易な評価がなされたら、その子の気持ちに寄り添った保育が後回しにされたり、脅かされる虞があります。ですから、新要領が、「他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉える」評価を強く戒めているのは非常に重要な指摘です。

では、「結果」で子どもを評価するという課題と、子どもの思いや人間らしさを尊重する共感的で応答的な保育者のかかわりとを、どうやったら両立させることができるでしょう。ニュージーランドの「学びの物語 Learning Stories」はまさに、「応答的な保育を守る」という精神に立って考案された、実践的な子ども評価の工夫です。そして、「学びの物語」を使った保育実践は、子どもへの肯定的で深い子ども理解をもたらし、頼もしい学び手を育み、保育実践を励ますものとして、保育者・保護者・小学校から歓迎され、大きな効果をあげてきました。

私たち自身が今直面している「子ども評価」という課題を、人間性尊重の保育を守り励ますものとして実践していくにはどうしたらいいのでしょうか。お二人の保育者の方に、日頃の実践や「学びの物語」について報告してもらった後、マーガレット・カー先生を囲んで語り合いたいと思います。

■報告要旨

報告1：小さな保育所の「挑戦」

報告者：黄木 久美子・山田 真理子（ありんこ保育園）

ありんこ保育園は1961年に東京都武蔵野市で無認可の共同保育所（乳児）として誕生しました。2015年に社会福祉法人立のもとで新園舎を建て、現在は幼児まで66名定員の保育所になりました。私たちが半世紀を超える「共同保育所運動」の中で学んだことは「想像（創造）力」「粘り強さ」「豊かな人間関係」の大切さです。

私たちは2009年から「学びの物語」の保育実践に「挑戦」しています。そのきっかけは、一人の子どもの「かみつき」事件です。その子にどう対応したらいいのか思い悩んでいるときに、「学びの物語」の視点で記録を読み直してみたら、それまで「乱暴な子ども」と見えていたのが、その子の行動の意味が「見える」ようになり共感できる

ものになり、肯定的に見えるようになりました。私たちの子ども観・保育観の転換でした。

それから8年間、「学びの物語」を保育実践に取り入れることで、保育にどんな変化が生まれたかを報告します。「学びの物語」の魅力の一つは、子どもを「信頼する」ということだと感じています。「信頼する」から「子どもの行動には意味がある」と見るようになり、応答関係が生まれます。そして子どもの心が見えてくると保育はとても楽しいものになります。楽しい保育は保育者を逞しくし、保護者も巻き込んで保育の質を高めます。

私たちの「学びの物語」の「挑戦」は、まだ入口に立ったばかりで模索中です。「学びの物語」の考え方に基づく保育計画づくりや、子どもを権利行使の主体者としてとらえるという子ども観・保育観を真に自分たちのものとするようになるためには、多くの課題を抱えています。そうしたもとの、私たちは①子どもの権利条約を保育にいかす、②日本国憲法を保育にいかす、という視点から保育原理や目標を見直しています。そこが理解し合えれば課題の展望が開けてくると考えています。両者の理念・原理を具体化するという課題を考えたときに、「学びの物語」は極めて優れた保育の方法の一つです。それゆえに③『「学びの物語」の保育実践に学ぶ』ことを併せ、3つの視点から人間的で豊かな保育実践をめざし、「挑戦」を続けていきたいと考えています。

報告2：私たちの保育と「学びの物語」

報告者：佐藤 寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

本園では、倉橋惣三が主事を務めた大正11年以来、子どもが自発的に遊ぶことを大切に、子どもの主体的な生活を中心とした保育を行ってきました。四季折々に花や実をつける草木や大銀杏のある都内にありながら自然豊かな園庭、長く真っ直ぐな廊下で各保育室がつながっている平屋造りの園舎など、恵まれた環境のもと、子どもたちは思い思いにやりたいことをみつけ、気に入った場を選んで遊んでいます。保育者は、子どもたち一人ひとりが、自ら動きだそうとする時を大切に、子どもが始めた遊びに必要な応じて関わり、関わりを通してその子の心もちを感じることができるよう、連携しながら保育にあたっています。

「学びの物語」から感じたことは、国を超え、時を超えて、子どもの時間は等しく尊いものであり、子どもが始めたことにはすべて意味があるということです。そして保育者は、自身も子ども時代を経て今を生きているにもかかわらず、あの頃感覚を忘れ、目の前の子どもの姿を見失い、他の何かを優先させてしまいがちになる、ということもです。

日々の保育の中には、子どもが眼差しを向けているものと同じように心奪われたり、発した言葉に思わず微笑んだり、作ったものを愛おしく思ったり…など、その子の今を感じ、未来へのつながりを思う瞬間がたくさんあります。幸いなことに本園には、その日の子どもたちとの関わりを語り合う場や保育者同士の関係があります。伝えたい、共有したいと思う仲間がいることは保育を支える基盤になっていると感じています。しかし一方で、保護者や小学校などに対して、幼児期の育ちをどのように伝えたらよいかは引き続き大きな課題であり、難しさを感じています。

「学びの物語」を方法論ではなく、ここから何を学びとることが今生きる子どもたちと彼等に関わる私達保育者にとって意味あるものとなるのかを考えていきたいと考えています。